

紀南の民家の地方性と近代化過程に関する生活史的研究

—熊野型民家の平面構成の特性と変遷—

主査 千森 督子*1

委員 山本 新平*2, 増田 亜樹*3, 川端 義治*4

本論文は、紀伊半島南部の熊野地方の民家の平面構成の地方的な特性と近代化過程を、住生活史的に捉えることを研究目的とする。これらの地域の民家は、カッテと呼ばれる多機能な家族生活の場と炊事場の構成に特色があり、竈がカッテの土間境やカッテ中に据えられる。平面構成には複数の型がみられ、地域特有のものがある。変容過程にも、竈をカッテに据える伝統的な形態に近代的な廊下型を取り入れるなど、地域的な特色がみられる。一方、竈は時代と共に改良され、立式化等の過程を経るが、昭和40年頃からは燃料源の変化と共に姿を消し、炊事場の構成も変容し、近代化が進んでいく。

キーワード : 1) 熊野の民家, 2) 平面構成, 3) 地方性, 4) 竈, 5) 床上, 6) 土間境, 7) 近代化

LIFE HISTORICAL STUDY OF THE REGIONAL FEATURES AND MODERNIZATION PROCESS OF MINKA IN THE SOUTHERN KII PENINSULA

— Characteristics of and Changes of the Housing Floor Plans in the Kumano Area —

Ch. Tokuko Chimori

Mem. Shinpei Yamamoto, Aki Masuda, and Yoshiharu Kawabata

This paper utilizes a historical approach to explore the regional features and modernization process of the housing floor plans of Minka in the Kumano region of the southern Kii Peninsula. Minka in this part of the peninsula are characterized by a multi-functional space called *katte*, where both family life and cooking took place. The cooking hearth was located on the *katte* floor so that cooking could be done seated there. Over time, this hearth was gradually improved, including changes that enabled cooking to be done standing up. After the mid-1960s, as fuel resources changed, the cooking area layout was altered and modernized.

1. はじめに

本論文は、民家の地方的な特性と近代化過程を住生活史的に捉えることを研究目的とし、対象地域としては、これまで研究蓄積が少ない紀伊半島南部の熊野地方¹⁾の民家を取り上げることとする。

紀州の民家の大半を占めた農家住宅の平面構成は、紀北、紀中、紀南に大別できる。紀北と紀中の民家は、通り土間形式で、床上部分は前座敷系統に属し、後列下手室が土間に張り出し、ダイドコロの呼称がある。座敷は2室に分化し、土間境食い違い三間取りから整形四間取りに発展していくが²⁾、貴志川、有田川の中流から上流域のように、近代以降もダイドコロが土間に大きく張り出す平面構成が継承される地域もある。紀北及び紀中の民家のダイドコロは、食事、団欒の家族生活と日常的な接客を兼ねた空間で、炊事は土間に集約され、竈や流し

は土間に設置されていた³⁾。

一方、紀南の熊野地方の民家は、紀北や紀中とは様相を異にし、カッテ⁴⁾と呼ばれる空間に特色がある。カッテは、炊事場と家族生活の場を兼ね、特に竈の位置や炊事場の形態に地域性がみられる。筆者らのこれまでの調査によると、紀南の民家は通り土間形式で、竈がカッテの土間境に据えられ、流しが土間にある形式以外に⁵⁾、前土間形式となり、竈と流しが共にカッテに据えられている形式もある⁶⁾。このように、熊野地方では、竈の位置や炊事場が多様な様相を呈している傾向がみられる。

しかしながら、熊野地方の民家に関する研究蓄積は少なく、断片的である⁷⁾。そこで、本論文では、紀南の民家の平面構成や住まい方の特性を捉えることを目的とし、とりわけ竈や流しの炊事設備に着目して、その近代化過程を明らかにする。

*1 和歌山信愛女子短期大学生活文化学科 准教授

*2 和歌山県文化財センター事務局 参与

*3 大阪人間科学大学人間科学部環境・建築デザイン学科 助教

*4 大阪人間科学大学人間科学部環境・建築デザイン学科 非常勤講師

2. 研究方法

紀南の民家の平面構成と住生活の特性、変遷を検討し、地域特性を明らかにするために、本論文では、熊野地方でも富田川から以南、熊野川から以西の田辺市中辺路町、大塔村、西牟婁郡上富田町、白浜町、すさみ町、東牟婁郡古座川町、那智勝浦町、新宮市、田辺市本宮町に至る地域を対象にした(図2-1)。

上記地域で平面構成や竈の位置に関して聞き取り調査と観察調査を実施し、竈が残されている家屋、あるいはかつて竈のあった家屋、合計78軒(34集落)を抽出した。なお、平面構成の発展過程を捉えるために、建て替え前の家屋に竈があった4軒の新築家屋も対象とした。調査家屋は、主に農林業を生業にしてきた家である。

調査家屋では、家屋実測調査と聞き取り調査を実施した。家屋実測調査は、主屋の平面構成を、間取り形式や寸法、炊事設備の流しや竈の形状や寸法、配置を平面図を採取しながら捉える。さらに、竈や炊事場の構成を捉えるために、竈が残されている炊事場の断面図を採取した。聞き取り調査は、属性や住まい方、増改築に関して、面接方式で居住者(所有者)に実施した。調査は、集落調査を主体とした予備調査と家屋実測調査と聞き取り調査を行なう本調査に分けて、平成19年6月から平成20年9月に至る期間に実施した。

考察は以上の調査家屋に既存調査家屋²⁾26軒(10集落、内2集落は重複)を加えた、計104軒の調査資料に文献を交えておこなう(表2-1)³⁾。



図2-1 調査対象地域と集落

3. 平面構成

本章では、熊野地方の民家の基本となる平面構成を捉えるために、できるかぎり現状から建築当初に復原し、変遷をも踏まえて考察する。

主屋の平面は、土間部分と床上部分から成るために、土間と床上の間取り形式により分類し、部屋の用途や造りとともに、地域特性と変遷を検討していく。

3.1 平面構成の分類

主屋はすべて平入り形式であるが、土間の形態は、通り土間型と前土間型に大別される(図3-1)。

土間形態と床上部分の間取り形式を一体にして捉え、基本となる平面構成を分類すると、大きく5グループに分けられる。I型は、通り土間に属する平面構成で、さらに、(1)通り土間広間型、(2)通り土間カッテ食い違い型、(3)通り土間カッテ後列張り出し型、(4)通り土間整形型に細分類できる。II型からV型は前土間系統に属するものである。II型の「前土間並列型」及びIII型の「L型土間並列一部縦二列型」は、床上部分が並列型の平面構成をもつ。IV型の「前土間二列カッテ張り出し型」は、基本とする床上部分が2列の平面構成で、下手にカッテが完全に張り出した型のことで、さらに(1)前土間カッテ後列張り出し型、(2)前土間カッテ前後列張り出し型、に細分類できる。V型は「前土間カッテ・炊事場並列張り出し型」で、カッテに並列して下手に炊事場が張り出す形態である。以上の結果、9つに細分類されることになる。その他、近代的な間取り形式として、室内に廊下を導入した「廊下型」がある。

3.2 平面構成別特性

つぎに、各平面構成の特性と地域的な分布状況、時代的推移について、調査事例を紹介しながら検討する。

I. 通り土間型

(1)通り土間広間型

文献資料²⁾によると、通り土間の上手に居室が1列に並ぶ「通り土間並列型」が田辺市大塔村と古座川町、新宮市で存在したことが知れるが、今回の調査家屋ではこの型に属するものは無かった。ただ、通り土間沿いの下手が1室となった平面構成が古座川町で1軒みられた。この事例は並列型というより、むしろ広間型に属するものと考えられる。建築年代は江戸時代に遡ると推定される家屋である(図3-2)。

土間沿いの広間が5畳と狭く、土間に半間張り出してあるために奥土間の幅は半間である。竈が広間と土間境に位置し、流しは土間隅にある。

上手は前後2室に分化し、表側が座敷で、裏側が寝室である。この形態は、隣接した古座川町西川より川向に移築したとされる、文献資料²⁾の下村家と同型である。

表 2-1 対象家屋一覧表

市町村	No.	住所	建築年代	前土間階居室の喪容	間取り形式	前列居室名(広さ)	後列居室名(広さ)	竈 竈と流しの位置	
富田川	1	小松原	昭和30年頃	／	I (2)	オクノ(8)・フイノ(4)	キマ(6)・／(4.5)	○ ①イヌ式	
	2	温川	昭和31年	浴室	I (3)→前土間化	オクノ(6)・オモイ(ウチノ) (4)	ナド(4.5)・オクノ(6)・キマ(4.5)	△ ①	
	3	栗根川	嘉永3年(1850)	浴室	I (4)→前土間化	オクノ(6)・オクノ(6)・タノシ(4)	ナド(4.5)・オクノ(6)・／(12.5)	△ ①	
	4	大内川	昭和18年頃	浴室・便所	特殊	オクノ(8)・オモイ(4.5)・ケンカン(3)・／(3)	キマ(6)・／(3)・／(4.5)・／(3)	○ ①イヌ式	
	5	生島	100年以上前(明治末)	物入れ(1.5)	I (4)別棟炊事場	オクノ(4.5)・オモイ(3)	ナド(3)・／(3)	△ ①→②別棟増築	
	6	生島	昭和35年	物入れ(1)	廊下型	オクノ(4.5)・オモイ(3)	ナド(6)・オモイ(3)	△ ①	
	7	安屋	大正5年以前	／	I (4)→前土間化	オクノ(6)・オクノ(4)・／(4)	／(5.5)・／(6) ナド(4)・オモイ(6)	△ ①	
	8	安屋	昭和17年	／	I (4)→前土間化	オクノ(6)・オモイ(6)	ナド(4.5)・イマ(4.5)・オモイ(3)	○ ①立式	
	9	市野野	不明(江戸時代)	物入れ(1)	／	オモイ(6)	ナド(4.5)・オモイ(4.5)	○ ②	
	10	市野野	明治末期頃	女衆部屋(上男衆部屋)(6)	I (4)	オクノ(8)・オモイ(4)	キマ(6)・オクノ(6)	△ ①	
	11	市野野	不明	物入れ(3+1.5)	I (4)	／(4.5)・／(3)	／(3)・／(3)	○ ①→②	
	12	市野野	不明	物入れ(1)	I (4)	／(6)	／(4.5)・／(3)	○ ①	
	13	市野野	昭和38年	／	I (2)鏡型	／(6)・／(6)	／(6)・／(4.5)	○ ②	
	14	市野野	昭和10年代	衛生空間	I (3)or(4)→廊下型	オクノ(4.5)・オクノ(4)	オクノ(3)・ナド(4.5)・イマ(オモイ) (3)・オモイ(4.5)	△ 不明	
	15	上野	明治末期	物入れ(1.5)	I (3)→I (3)	オクノ(4.5)・オモイ(3)	オクノ(4)・オモイ(4.5)	△ ②	
	16	和田	明治28年	物入れ(1)	I (3)	オクノ(4.5)・オモイ(3)	キマ(4)・イマ(3)・オモイ(2)	○ ②	
	17	下川下	大正末期	物入れ(4)→子供部屋(4.5)・浴室	I (3)→前土間化	オクノ(6)・オモイ(4)	キマ(4)・イマ(3)・オモイ(3)	○ ②	
	18	下川下	大正12年	／	I (3)	オモイ(4.5)	キマ(4)・イマ(3)・／(4.5)・／(3)	○ ②	
	19	向山	明治時代頃	風呂	I (3)	／(6)	／(3)・／(3)・／(4.5)	○ ②	
	20	向山	昭和初期頃	風呂	I (3)→前土間化	／(6)	／(4.5)・／(4.5)	○ ②	
	21	向山	昭和25年頃	／	I (3)	／(6)	／(3)・／(2)	○ ②	
	すさみ川	22	佐本深谷	不明(主屋昭和33年)	／	IV(1)→廊下型	オクノ(4.5)・オモイ(4.5)	キマ(4.5)・オモイ(4.5)	○ ②
23		佐本深谷	明治時代	オコベヤ(2)	IV(1)	トコノ(4.5)・オモイ(4.5)・ケンカン(3)	キマ(4.5)・オモイ(4.5)・オモイ(3)	○ ②	
24		佐本深谷	明治時代	オコベヤ(3)	IV(2)	オモイ(3)・／(4.5)・ケンカン(3)	キマ(3)・／(4.5)・／(3)	○ ②	
25		佐本深谷	90年程前(大正中期)	オコベヤ(1.5)→(2)	I (3)	オモイ(4.5)・オモイ(3)	キマ(3)	○ ②	
26		佐本深谷	昭和34年	／	IV(1)	オモイ(4.5)・ケンカン(3)	キマ(4.5)・／(3)	○ ①腰かけ	
27		佐本平野	100年程前(明治末)	オコベヤ(1)	IV(2)	オクノ(4.5)・オモイ(3)	キマ(4.5)・／(3)・オモイ(4.5)→0	○ ②→④	
28		佐本平野	明治34年	居室(3)	IV(1)変形	／(6)・／(8)・／(2)・／(3)	／(6)・／(6)・／(4.5)	○ ①腰かけ	
29		佐本平野	100年程前(明治末)	ケンカン(2)→応接間	IV(1)	オモイ(4.5)・オモイ(4.5)	キマ(4.5)・オモイ(4.5)・オモイ(4.5)	△ ②	
30		佐本平野	40年前(昭和40年頃)	物入れ(0.5)	IV(1)変形	／(6)・／(4.5)	オモイ(3)	○ ②	
31		防己	明治時代	オコベヤ(3)	IV(1)	オクノ(4.5)・／(4.5)・／(2)	ナド(4.5)・／(4.5)・オモイ(6)	○ ②→①腰かけ→④	
32		防己	昭和46年頃	／	IV(2)	オクノ(4.5)・オモイ(4.5)・オモイ(5)	キマ(4)・／(4.5)・オモイ(3)	△ ②	
33		上戸川	不明(江戸末期)	／	I (3)→前土間化	／(4.5)・／(4.5)・／(3)	／(4.5)・／(4.5)・／(4.5)	△ ②	
34		上戸川	天保15年(1844)	／	I (3)→前土間化	オクノ(4.5)・オモイ(4)・／(6)	ナド(6)・オモイ(3)・オモイ(3)	△ ②	
35		上戸川	明治時代	ハジ(2)・オコベヤ(2)→衛生空間	I (3)	／(4.5)・／(3)	／(4.5)・／(4.5)・オモイ(3)	○ ②	
36		上戸川	明治23年	／	I (3)	オクノ(4.5)・／(6)・ケンカン(4.5)	ナド(4.5)・オモイ(4)・オモイ(6)・オモイ(6)	△ ②	
37		上戸川	90年程前(大正中期)	ミヅキ(4)	I (3)	オクノ(6)・オモイ(6)	キマ(6)・／(4.5)・オモイ(4.5)	△ ②	
38		上戸川	80年程前(昭和初期)	3畳の間の(3)→浴室	I (3)	オクノ(6)・オモイ(6)	キマ(4.5)・オモイ(4.5)・オモイ(4.5)	△ ②→①	
39		岡本	明治18年	物入れ(1.5)	I (3)	オクノ(6)・オモイ(6)	ナド(6)・オモイ(3)・オモイ(4)	△ ②→①立式	
40		岡本	昭和25年頃	／	I (3)→前土間化	オクノ(8)・オモイ(6)	キマ(6)・／(4.5)・／(3)	△ ②→①立式	
41		和歌山	100年以上前(明治末)	→物入れ(0.5)	I (3)→前土間化	オクノ(6)・オモイ(3)	キマ(6)・ヒコ(3)・イマ(3)	△ ②	
42		和歌山	大正5年頃	→応接間	I (3)→前土間化	オクノ(6)・オモイ(6)	／(4.5)・／(4.5)・／(4.5)	△ ②	
東牟婁郡古座川町		43	平井	100年以上前	／	I (3)→前土間化	オクノ(6)・オモイ(6)・ケンカン(3)	キマ(4.5)・オモイ(4.5)・オモイ(3)・／(6)	△ ②→
	44	平井	100年以上前	／	→IV(2)変形	／(4.5)・／(4.5)・／(3)・／(4.5)	／(4.5)・／(4.5)・／(6)・／(6)	○ ②→④	
	45	平井	不明100年以上	／	IV(2)	オクノ(3)・オモイ(4.5)・／(2)・／(3)	キマ(2)・オモイ(3)・オモイ(3)	△ ②→④	
	46	松根	明治30年	オコベヤ(4)	IV(1)	トコノ(4.5)・／(6)・ウチノ(4.5)	キマ(6)・／(6)・オモイ(6)・／(4.5)・オモイ(3)	△ ②	
	47	西川	明治時代頃	→書斎(3)S60	I (3)	／(6)・／(6)	／(3)・／(4.5)・／(4.5)・オモイ(4)	△ ②	
	48	西川	昭和45年頃	／	II	オクノ(4.5)・オモイ(4.5)・オモイ(2.5)	／(3)・／(4.5)・／(4.5)・オモイ(4)	○ ②	
	49	松の前	大正から昭和	／	I (3)変形	オクノ(4.5)・キマ(3)	キマ(3)・／(2)	○ ②	
	50	松の前	昭和36年	／	I (3)	／(6)・／(3)	／(6)・／(3)	×	
	51	松の前	昭和60年頃	／	廊下型	／(6)・／(4.5)・／(6)	／(4.5)・／(4.5)	×	
	52	西赤木	明治27年以前	／	I (3)	／(4.5)・／(4.5)・／(2)	／(3)・／(3)	○ ②	
	53	西赤木	不明100年以上前	物置	I (1)	オクノ(3)・／(5)	キマ(3)	○ ②	
	54	西赤木	昭和30年頃	／	IV(1)→	オモイ(4.5)・／(4.5)	キマ(4.5)・オモイ(4.5)	△ ②	
	55	西赤木	昭和30年頃	／	II→IV(1)	／(4.5)・オモイ(4.5)・ケンカン(3)	／(3.5)・オモイ(3)・オモイ(2)	△ ②分離	
	56	小川	130年以上前	／	I (3)→前土間化	オモイ(4.5)・オモイ(4.5)・／(1.2)	キマ(4.5)・オモイ(3)・／(3)	△ ③	
	57	小川	明治頃	／	IV(1)変形	／(6)・／(6)・／(8)	／(4.5)・／(4.5)・／(6)	○ ②	
	58	小川	大正末期	／	I (3)	／(3)・／(2)	／(4.5)・／(3)	○ ②	
	59	三島川	明治初期	／	特殊	オモイ(6)・ケンカン(4.5)・イマ(5)	オモイ(6)・イマ(4.5)・オモイ(6)・ケンカン(3)	○ ②	
	60	三島川	明治22～26年	物置→子供部屋(3)S43→物置	I (3)→前土間化	オモイ(4.5)・イマ(4.5)	オモイ(4.5)・オモイ(4.5)・オモイ(5)	○ ②	
	61	三島川	明治時代	／	I (3)	／(3)・／(4.5)	／(3)・／(4.5)・／オモイ(3)	○ ②	
	62	三島川	昭和初期	物置→子供部屋(6)S40→物置	IV(1)	オクノ(4.5)・オモイ(4.5)	キマ(4.5)・／(4.5)・／(3)	△ ②	
	63	三島川	昭和35年	物入れ(2)→応接室(4.5)	I (3)→前土間化	オクノ(4.5)・オモイ(4.5)	キマ(4.5)・／(3)・オモイ(2)	△ ②	
	64	三島川	昭和42年	(後土間)→シヨクノ→便所H5頃	I (4)→前土間化	オクノ(6)・オモイ(4.5)	キマ(6)・イマ(4.5)	△ ①	
65	三島川	昭和35年	／	廊下型	／(6)・／(6)・／(8)	／(6)・／(6)	×		
東牟婁郡那智勝浦町	66	南大屋	昭和初期頃	／	IV(2)	トコノ(4.5)・／(6)	キマ(4.5)・／(4.5)・／オモイ(2)	○ ②→④	
	67	南大屋	昭和28年	／	IV(1)→IV(2)	／(4.5)・／(4.5)・／(4.5)	／(4.5)・／(3)	○ ②→④	
	68	上登井	昭和17年	／	IV(1)	／(4.5)・／(6)	／(4.5)・／(4.5)	○ ②	
	69	小登	昭和35年	／	II	／(6)・／(6)・／(6)	／(4.5)・／(4.5)	○ ②	
	70	口色川	不明	／	→IV(2)	オクノ(4.5)・オモイ(4.5)	キマ(4.5)・／(4.5)	○ ②→④	
	71	大野	明治10年頃	／	IV(2)	オクノ(4.5)・オモイ(3)・オモイ(4.5)	キマ(4.5)・／オモイ(2)・／(4.5)	△ ②	
	72	口色川	明治18年	／	IV(2)	オクノ(4.5)・オモイ(4.5)・ケンカン(4.5)	キマ(4.5)・オモイ(4.5)・／(6)	△ ②	
	73	口色川	明治時代頃	／	IV(2)or V	オクノ(4.5)・オモイ(4.5)・ケンカン(4.5)	オクノ(4.5)・オモイ(4.5)・オモイ(6)	△ ②→①	
	74	大野	明治末期	／	IV(1)変形	／(6)・／(4.5)・／(4.5)	／(6)・／(4.5)・／(4.5)	○ ②	
	75	口色川	大正10年	／	IV(1)	オクノ(4.5)・オモイ(6)・ケンカン(4.5)・オモイ(3)	オクノ(4.5)・オモイ(6)・オモイ(6)	○ ②	
	76	口色川	昭和6年	／	IV(2)	オクノ(6)・オモイ(4.5)・オモイ(4.5)	／(6)・／(4.5)・オモイ(4.5)	○ ②	
	77	口色川	昭和29年	／	IV(1)	／(6)・／(6)・／(4.5)	／(4.5)・／(4.5)・／(4.5)	○ ②	
	78	口色川	昭和29年	／	IV(2)	／(4.5)・／(4.5)・オモイ(6)	／(6)・／(4.5)	△ ⑤	
	79	口色川	昭和30年	／	II	／(3)・／(3)	／(2)・／(2)	△ ②	
	80	口色川	昭和51年	／	廊下型	オクノ(6)・／(6)・イマ(6)	キマ(6)・／(4.5)	×	
	81	二河	明治9年	土間→穀物庫	I (3)→前土間化	／(8)・／(6)・／(6)	ナド(4.5)・オモイ(4.5)	△ ②	
	那智川	82	本川	明治時代	物置	I (3)	／(4.5)・／(3)	／(4.5)・／(3)・／(3)	○ ②→①
		83	本川	明治12年頃	／	I (3)→前土間化	オクノ(6)・／(8)	／(6)・イマ(6)	△ ②
		84	本川	不明	／	I (3)→前土間化	／(6)・／(4.5)	／(3)・／(4.5)	△ ②
		85	本川	明治時代	→物置	I (3)→前土間化	オクノ(6)・／(3)	キマ(4.5)・／(3)・オモイ(3)	○ ②→④
		86	本川	昭和4年頃	／	I (3)	／(6)	／(6)・／(4)・／(3)	△ ②
		87	本川	昭和6年	物置→	I (3)→IV(1)	オクノ(8)・／(4)	／(6)・イマ(4.5)・オモイ(6)	△ ②
88		本川	昭和初期	／	IV(1)→	オモイ(8)・シヨクノ(4)	キマ(4.5)・オモイ(3)・／(4.5)・／(4.5)	△ ②	
89		本川	昭和35年頃	／	廊下型	オクノ(8)・オモイ(4)	／(6)・オモイ(3)	△ ②	
90		南権杖	昭和18年	／	V	オクノ(6)・／(6)・／(3)	キマ(4.5)・オモイ(4.5)・／(6)	○ ④	
91		相賀	明治30年頃	／	IV(2)→	／(3.5)・／(4.5)・／(4.5)	／(3)・／(3)・／(4.5)	○ ③→②	
92		相賀	不明	／	V	オクノ(6)・オモイ(6)	オクノ(4)・／(3)・オモイ(6)・オモイ(3)	○ ②	
93		高田	明治頃	／	V	オクノ(6)・オモイ(6)・／(オモイ) (7.5の一部)	キマ(3)・／(3)・オモイ(7.5の一部)・オモイ(3)	△ ④	
熊野川	94	高田	明治中期	風呂	IV(2)→V	／(4.5)・／(4.5)	／(2.5)・／(3)・／(6)	○ ④→①	
	95	高田	明治から大正	／	IV(2)	オクノ(6)・／(4.5)	／(3)・／(4.5)・／(3)	○ ④→②→③	
	96	高田	不明	物置	→IV(2)	／(6)・／(6)・／(6)・／(4.5)・／(2)	／(6)・／(6)・／(6)	△ ②	
	97	東	不明	一風呂	／(6)・／(6)・／(4.5)・／(2)	／(3)・オモイ(4.5)・シヨクノ(4.5)	△ ②→①		
	98	東	昭和初期	／	II変形	オクノ(4.5)・オモイ(4.5)・オモイ(6)	キマ(3)	○ ④	
	99	熊野川	不明	物置・風呂	V	オクノ(6)・オモイ(3)・／(8)・／(2)X2	オモイ(5)・オモイ(5)・キマ(6)・オモイ(6)	△ ④→③	
	##	三越	100年以上前	／	II→前土間化	／(6)・／(4.5)・／(4)	／(4.5)・／(6)	○ ②→④	
	##	三越	大正15年	／	III	オクノ(8)・オモイ(4.5)	キマ(3)・オモイ(3)・オモイ(5)	○ ②→①	
##	伏拝	昭和25年	／	III	／(8)・／(4.5)	／(3)・／(4.5)	△ ②		
##	三越	炊事場昭和40年頃	／	III	／(8)・／(6)・／(4.5)	／(4)	○ ②		
##	久保野	昭和初期	／	III→II変形	／(8)・／(3)・／(4.5)	／(4.5)	○ ②		

／…無(0)…畳数 S…昭和 H…平成

I…通り土間型 II…土間並列型 III…L型土間並列一廊下型 IV…前土間二列型 V…前土間二列型 V…前土間二列型 V…前土間二列型

／…呼称なし()…畳数 ○…有 △…元有 ×…無

①「竈土間・流し土間」
②「竈土間・流し土間」
③「竈土間・流し土間」
④「竈土間・流し土間」
⑤「竈土間・流し土間」

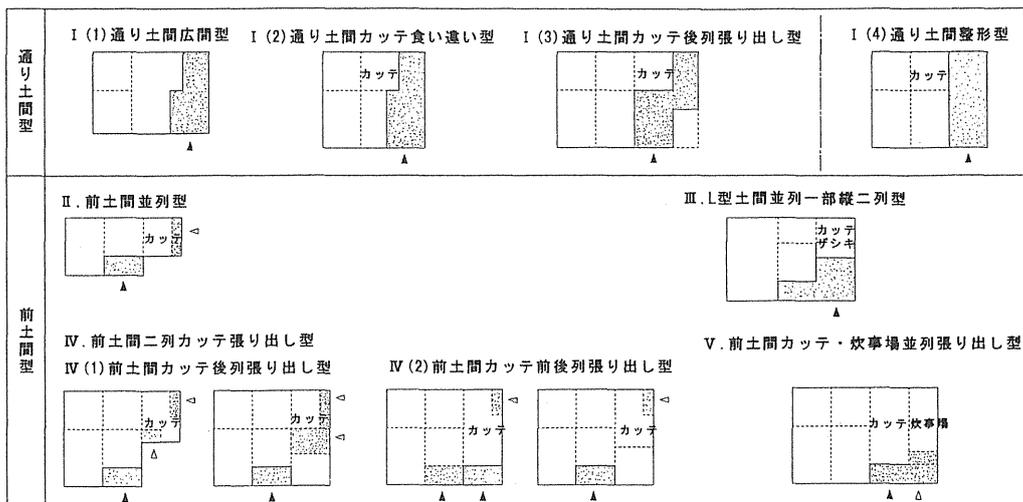


図 3-1 平面構成の分類

以上の事例から、紀南の民家には、紀北や紀中のように前座敷系統から四間取りに発展する以外に、並列型から広間型三間取りになり、四間取りに発展する流れがあったと考えられる。

(2) 通り土間カッテ食い違い型

床上部分が前後 2 列に分かれる平面構成の内、下手後列室が半間土間側に張り出す形態を「通り土間カッテ食い違い型」とする。この型でも前列座敷が未分化の三間取りは、近世から近代初頭に紀北から紀中で普及していた平面構成で、「整形間四取り」の祖型とも考えられている³⁰⁾。調査地域では 4 軒と数少なく、大半が調査地域北部に偏っており、とりわけ、日置川中流域の盆地で比較的平野部が開ける白浜町市鹿野の集落に集中している。

建築年代は、江戸時代末期(1 軒)、明治時代(1 軒)、そして昭和 30 年代(2 軒)と二極化している。江戸時代末期の建築とされる家屋のみが三間取りで、他は前列が二分された四間取りになっていることから、座敷の分化が近代以降に行われていることが推測される(図 3-3)。

前列が座敷、後列が家族生活の場であるが、田辺市中辺路町の昭和 30 年代の家屋は、竈と流しが土間にあるが、その他は竈が後列下手室の土間境に位置し、流しは土間隅にある。

(3) 通り土間カッテ後列張り出し型

下手後列室が 1 室完全に土間側に張り出した型である。貴志川や有田川の上流域でもみられたが、紀南では、すさみ川下流域、古座川下流域、那智川下流域の集落に集中的に分布する。いずれも河川の下流域に位置し、わずかな平野部で稲作が行われてきた地域である。

調査家屋の 4 割近くを占める主要な平面構成であり、年代的には、江戸時代の事例を含め、明治時代(図 3-4)から昭和 30 年代まで幅広い時代で確認される。

この型では、中辺路町の昭和 30 年代のものを除き、竈はカッテと土間境に位置し、流しは土間隅にある。

(4) 通り土間整形型

前後 2 列に分かれた後列土間沿いの下手室が張り出さず、前後列が揃っている整形の事例は、今回の調査では少数であった。調査地域では北西部に集中し、田辺市中辺路町から西牟婁郡上富田町、白浜町で確認される。これらの地域では郷土誌³¹⁾³²⁾に掲載されている平面構成も同形態なので、主な平面構成であったと推定される。

なお、この型は主屋内に竈と流しが設置されている場合は土間にあり、居室の土間境に竈は位置しない。紀中以北の民家の平面構成と同形態で、竈と流しの配置も同様である。

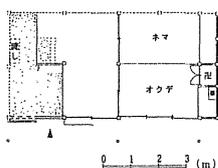


図 3-2 I (1) 通り土間広間型

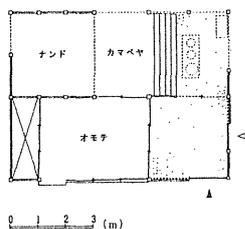


図 3-3 I (2) 通り土間カッテ食い違い型

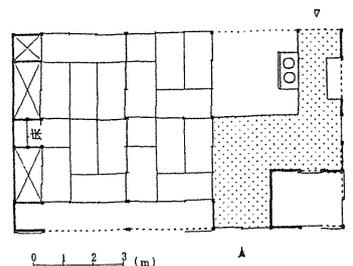


図 3-4 I (3) 通り土間カッテ後列張り出し型

II. 前土間並列型

この型は、居室が横に並ぶ並列型の構成であるが、主入口の土間が1坪から半坪程の大きさで居室前面に設けられている。調査家屋では4軒と少数である。地域的には、古座川上流域（2軒）（図3-5）と那智勝浦町の太田川中・上流域（2軒）で確認された。

これらの家屋は最小とも考えられる2室、3室の構成であり、梁間が1間半から2間と狭く、各室も小規模で3畳や4畳半が多い。建築年代は新しく、いずれも昭和30年から40年代の家屋である。部屋数の少ない、小規模なこの型を用いた理由は、結婚後に新築したために経済力がなかったことや、成長した子供のための居室を離れて増設することがあげられていた。

図3-5の家屋を用いて部屋の用途をみると、カッテでは炊事と簡易な食事が、チャノマは団欒と食事以外に、位置から接客・応対が行われる。上手のオクノマは寝室であり、仏間でもある。各室で機能の重複がみられる。

この型の竈と流しの位置は、古座川上流と太田川上流の家屋では、カッテと土間境に竈が位置し、流しは土間隅にある。太田川中流の1軒は、竈はカッテの中程にあり、流しもカッテ隅の床上にある。このように同じ平面構成であるが、竈と流しの位置は異なる。

III. L型土間並列一部縦二列型

前土間形式であるが、戸口が平面構成の中程に位置し、土間が前面から居室隅へL型に折れ曲がるもので、床上が並列型と二列型の間隔的な形態の平面構成である。居室中央部が前後2室に分化しているが、上手と下手が1室の構成である。この平面構成は、本宮町でも熊野川の中流域に位置する三越、伏拝、久保野でみられた。

上手座敷は、8畳で前面に縁をもち、紀南の民家の座敷規模にしては大きい。中央列の前面が上がり口、接客・応対のための部屋で、後列室が寝室となり、下手が家族の日常的な生活空間で、一般にカッテ、またはザシキと呼ばれている（図3-6）。分化した後列室は、3畳

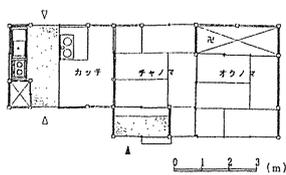


図3-5 II 前土間並列型例

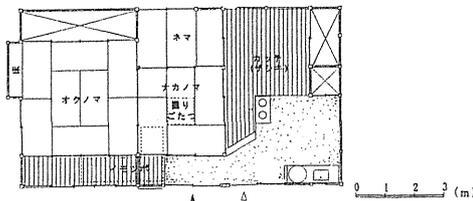


図3-6 III L型土間並列一部縦二列型例

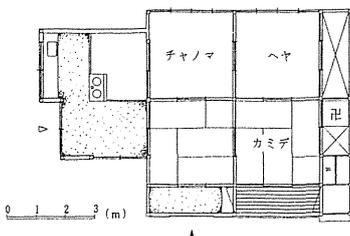


図3-7 IV (1) 前土間カッテ後列張り出し型例1

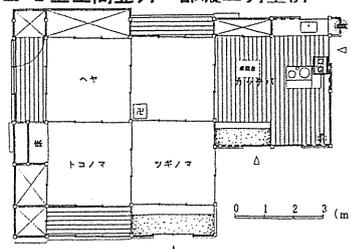


図3-8 IV (1) 型例2

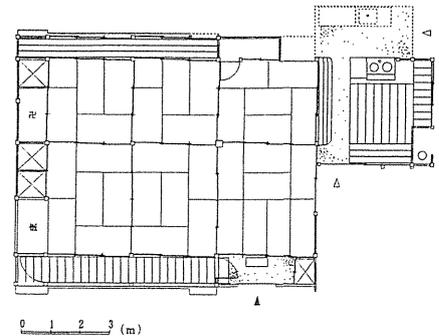


図3-9 IV (1) 型例3

の広さであるが、昔はサンジョウ（産場）と呼ばれ、産室としても使われたようである。

この型に属する調査家屋の建築年代は、明治、大正、昭和と各時代で見られる。最も新しい家屋が昭和25年であることから、戦後も踏襲されていたことがわかる。

竈はザシキと土間境に据えられ、床上側に焚口があり、流しは土間隅にある。

IV. 前土間二列カッテ張り出し型

前土間型で床上部分が2列構成であり、カッテが下手に張り出した平面構成である。この型は西部のすさみ川や古座川では上流域で、東部の太田川では中、上流域、熊野川では下流域で見られる。調査家屋の3割近くを占め、「通り土間カッテ後列張り出し型」に次いで主要な平面構成である。建築年代は、明治時代から昭和30年頃までみられ、時代的な偏りはない。

(1) 前土間カッテ後列張り出し型

主屋の下手後列に別棟や落棟でカッテが1室張り出した型である。カッテは主屋の床上部分と連続しているものと、通り土間を挟んで分離した形態がある。

連続している場合は、大半が流しの前が土間になっているが（図3-7）、那智勝浦町では床上の流しもある（図3-8）。

他方、通り土間を挟んで主屋の床上と分離した形態は明治時代に建築された2軒の家屋で、いずれも家事作業に携わる女衆がいたと考えられる山林地主等の上層階層の家屋である。焚き場は4畳程の広さがある（図3-9）。

(2) 前土間カッテ前後列張り出し型

基本の床上部分の下手に、カッテが後列から前列まで張り出す、あるいは後列がカッテ、前列には他の居室が設けられた型で、形態的には整形である（図3-10）。

竈はカッテと土間境に位置するものと、カッテ上に据えられたものがある。

前列に他の居室が設けられる場合、大半が、かつては炊事作業や農作業の手伝いをしていた男衆や女衆が寝起きしていた部屋で、オトコベヤ等の呼称が残されている。

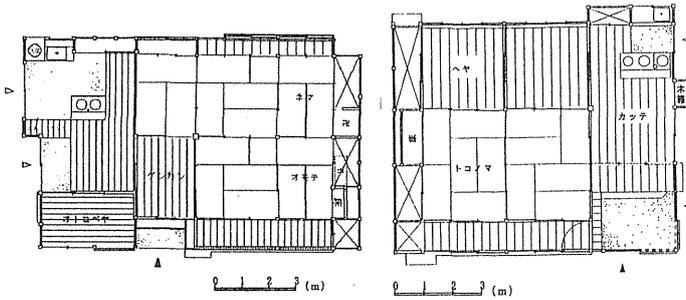


図 3-10 IV (2) 前土間カッテ前後列張り出し型例

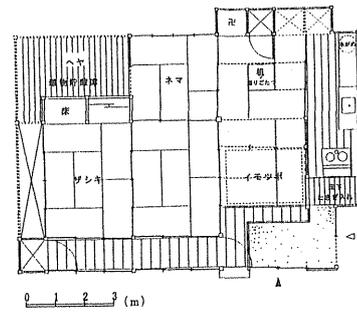


図 3-11 V 前土間カッテ・炊事場並列張り出し型例

V. 前土間カッテ・炊事場並列張り出し型

カッテの下手に1間幅の細長い炊事場が前列から後列まで梁行方向に設けられた平面構成で、炊事場がカッテから分離した形態である。

この型は6軒と少数で、地域的には那智勝浦町に1軒あるが、他は新宮市の熊野川流域（南檜杖、相賀、高田、篠尾）に分布している。炊事場がカッテからいつ頃分化したのかは特定できないが、調査家屋の年代は明治時代や江戸時代に遡るとされる古い事例と、昭和18年の新しい事例がある。竈は土間境から半間程内側の床上に据えられ、焚口は土間側に向く（図3-11）。

型」、「L型土間並列一部縦二列型」、「前土間カッテ・炊事場並列張り出し型」である。

平面構成には地域的な分布傾向がみられる。富田川、日置川流域は通り土間型の平面構成の分布域であるが、流域でも下流から中流域では「通り土間整形型」が、中流域から上流域では「通り土間カッテ後列張り出し型」が分布する。一方、すさみ川では下流域が「通り土間カッテ後列張り出し型」が分布するが、上流域では「前土間二列カッテ張り出し型」がまとまって分布している。南部の古座川では「前土間並列型」、「通り土間カッテ後列張り出し型」、「前土間二列カッテ張り出し型」が混在している。東部の那智勝浦町の太田川流域では「前土間二列カッテ張り出し型」が主流である。さらに東部の新宮市の熊野川流域では「前土間カッテ・炊事場並列張り出し型」が、本宮町では「L型土間並列一部縦二列型」が集中的にみられる（図3-12）。

3.3 平面構成の概括と住まい方

本節では、分類した平面構成を概括し、熊野地方の民家の特性を捉える。

平面構成が5グループ、9型に分けられたが、そのなかには紀北や紀中にはみられない平面構成が確認される。「通り土間広間型」や山間部特有の平面形態とされる「前土間並列型」、さらに「前土間二列カッテ張り出し

そのために、通り土間は熊野地方でも北西部に集中し、その他、南部から東部の盆地や平野部に分布する。一方、前土間型は古座川の上流から東部山間部に分布している。

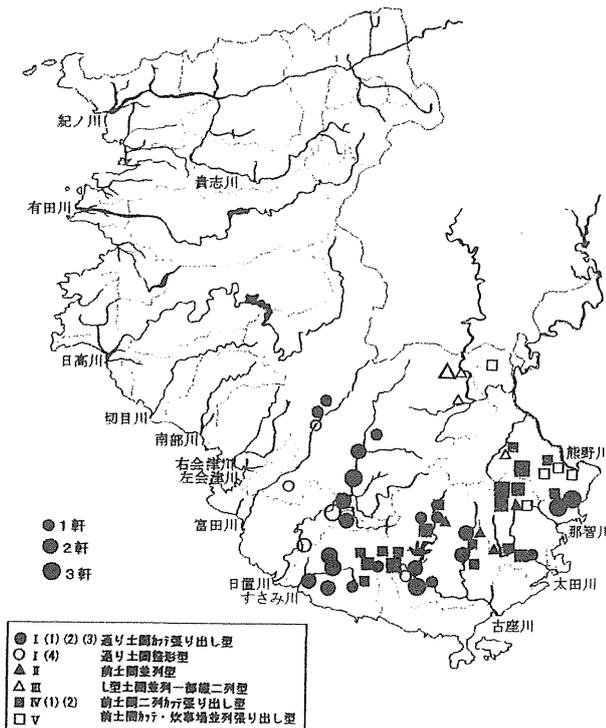


図3-12 平面構成型別分布図

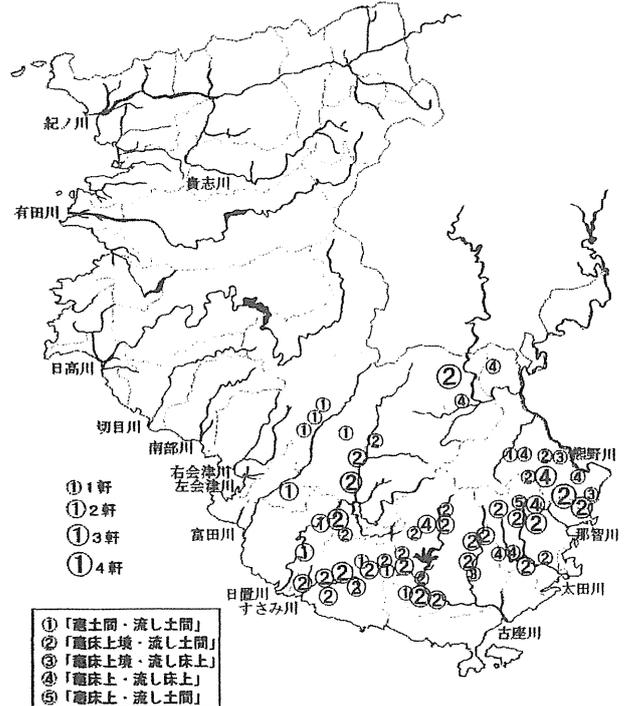


図3-13 竈と流しの位置関係

これらの平面構成の大半は床上部分が、前座敷系統の2列構成である。前列は2室に分化し、下手室は上がり口の間であり、上手室は主座敷である。主座敷は6畳が一般的な広さで、最小は3畳、最大が8畳である。地域的には新宮市や田辺市本宮町で8畳の規模の大きい座敷構成がみられる。主座敷には床の間が備えられるが、比較的簡素で、床の間だけが張り出して設けられたものや、奥行きが非常に浅い、押し板のようなものがある(図3-6)。玄関構えをもつ上層の家屋でも、違い棚や書院の座敷飾りを併設したものは少数であるが、昭和以降の新しい家屋では比較的普及している(図3-11)。

後列上手室は就寝空間が一般的であるが、米等を収納したとされる2畳から3畳の米納戸をもつものもある。下手室は、家族の日常的な生活空間で、団欒と食事の機能に炊事の機能が加わる。

部屋の呼称は、前列がオクノマ・オモテで比較的共通しているが、後列が地域により異なり、後列上手室は、田辺市中辺路町から白浜町までがナンド、以南のすさみ町まではネマ、古座川町から東部はヘヤが主である。後列下手室は一般的にカッテであるが、本宮町ではカッテ以外にザシキの呼称もみられる(表2-1)。

3.4 平面構成にみる竈と流しの位置関係

つぎに、竈と流しの位置に着目して、基本になる主屋の平面構成から分析すると、以下の組み合わせがある。

- ①「竈土間・流し土間」、②「竈床上境・流し土間」、
- ③「竈床上境・流し床上」、④「竈床上・流し床上」、
- ⑤「竈床上・流し土間」の5つである。

調査家屋の多くが②「竈床上境・流し土間」であるが、組み合わせを集落単位に整理すると、地域特性がみられる。すなわち、富田川流域と日置川下流域は、①「竈土間・流し土間」が主であり、日置川上流域とすさみ川と古座川の流域は②「竈床上境・流し土間」である。一方、太田川と熊野川の流域では②「竈床上境・流し土間」と④「竈床上・流し床上」が混在している(図3-13)。

さらに平面構成の分類を重ね合わせると傾向がみえてくる。すなわち、「通り土間整形型」は①「竈土間・流し土間」の組み合わせであり、竈が床上境や床上には位置しない。②「竈床上境・流し土間」は、通り土間型でも、「カッテ張り出し型」だけではなく、「カッテ食い違い型」でも確認された。また、通り土間型だけでなく、前土間型でもみられることが明らかになった(表2-1)。

竈と流しの位置も変遷していくが、②「竈床上境・流し土間」から①「竈土間・流し土間」に変化していく傾向がある。他方、②「竈床上境・流し土間」から④「竈床上・流し床上」に変化する傾向もある。この場合、竈が移設されるのではなく、流し前の土間の床上化に因るもので、落ち縁の形態になっているものが多い(表2-1)。

4. カッテと炊事場の地域特性

本章では、紀南民家の特徴とも考えられるカッテと炊事場の構成、さらに主要な炊事設備である竈と流しについて検討していきたい。

4.1 カッテの機能と構成

カッテの機能は、竈が設置されている場合は、炊事機能が加味されるために、団欒、食事、炊事、日常的な接客の4つの機能をあわせもつ。さらに、イモツボと呼ばれる穀類を収納するための床下収納庫が、カッテの下に多く設けられているために格納場としての役割も備える。

床は畳が敷かれている場合もあるが、本来は板間であり、ヒドコと呼ばれた竈周囲の焚き場には筵を敷いていた。広さは狭いもので2畳、広い場合は6畳程である。

カッテの土間周りは、建具がなく開放されている。

4.2 炊事場の構成

炊事場は主屋内の平面構成に取り込まれているものと、分離したものがあがるが、多くがカッテと隣接している。

炊事場の床は、①土間、②土間と床上、③床上に分けられる。土間は出入口、炊事作業場、通路の機能を持ち、形態的には、一型、I型、L型、コ型がある。土間が設けられている場合は、主出入口が前土間型であっても、竈が土間沿いに設置される焚き場の構成が可能となる。

4.3 竈

竈はこれらの地域ではクドと呼ばれ、主食や副食の調理、茶沸かし、あるいは牛の飼料の煮炊きにも用いられてきた。竈の主な用途は炊事にあるが、炉の発達していない温暖な地域では調理しながら採暖にも用いられたことが文献からも知れるが、熊野地方でも暖房設備としての機能をもつ。1日の生活時間上、暖房に用いる時間が長いために、床上から焚きやすいように、竈の焚口は床上側に向くように多くが配置される(図4-1)。

竈の火口数は、2口か3口である。同じ大きさのものと、大中小と大きさが異なるものがある。竈の形は湾曲した三日月型ではなく直列型であり、その外形寸法は幅90 cmから120 cm、奥行が45 cmから60 cm程である。

竈の材料は、古くは赤土と石灰、そしてスサを混ぜて苦汁で煉って造られ、表面は塗装されていなかった。

燃料源である薪は、キバコと呼ばれる木製の箱に入れられる。キバコは取り出しやすいように、竈の左右や下部に置かれている。昭和初期の建築では、建築時から壁に薪を格納する棚を造りつけた家屋もある(図3-10)。

4.4 流し

流しは、昭和30年代まで古風な木製流しが使われていた家もあったようであるが、作業形態はすべて立式で

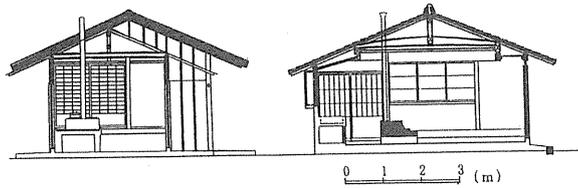


図 4-1 土間境に設置された焚口が床上側竈

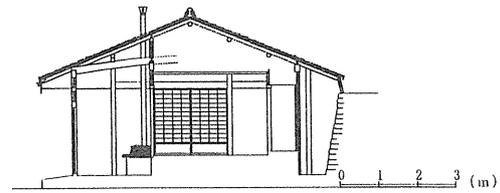


図 4-2 土間境に設置され土間側に焚口を向けた竈

ある。聞き取り調査で確認された上限は、大正年間であったが、床上に流しが据えられていた炊事場でも座り流しの形式は確認されていない。

生活用水は、簡易水道が普及するまでは、谷水を自宅に引き、庭隅に備え付けられたフネと呼ばれる木製の貯水槽に流し込み、そこから汲み、屋内の水甕に溜めた。

水甕は炊事がしやすいように、流しの横に置かれる。単に据えられるのではなく、建築時から流しと水甕が一体化して組み込まれるようになり、水甕も流しと共に炊事施設化されていく。昭和6年建築の新宮市木ノ川の民家の家相図には、組み込まれて描かれている。

さらに、昭和17年に建築された、那智勝浦町上長井の家屋の炊事場は、水甕が屋内外から用いられるように、平面構成に組み込まれている。外部から給水できるように、他方、屋内から汲み取れるように、甕の中央に外壁の板壁が間仕切りに入る構成になっている(図3-8)。

昭和8年生まれの新宮市木ノ川の古老の話によると、排水も流し下の甕に溜めて、小尿と混ぜて肥料として活用したようである。昭和25年に井戸を設けるようになり、30年代になり、集落での簡易水道化が進むようになると、ようやく甕の必要性がなくなる。

4.5 竈と焚き場の変遷

4.5.1 竈の変化

①材料と施工

竈は時代と共に改良されていく。材料や造りでは、土造から煉瓦造、タイル貼りの竈に変化していく。

さらに施工方法をみると、現場で築く方法から、既製品へと変化していく。既製品化の一つに「瓦くど」と呼ばれた組み立て式の竈がある。これは外枠が3つのパーツに分かれた状態で市販され、自家で据えて内部に赤土を塗り固めて造る竈である。表面が、漆喰に硝煙を混入して塗り固めて仕上げられたために、瓦の様な色と仕上げである。そのためにこのような呼称が生まれたと考えられる。左官の必要がなく、簡易に設置できる。新宮市相賀の家屋では昭和20年頃に赤土の竈から瓦くどに替えたことから、当時すでに市販されていたことがわかる。

さらに、既成竈を据え置く、据え置き式が昭和40年代以降に普及するようになる。表面がタイル貼りに仕上げられ、瓦くどよりも意匠性が加味され、手軽である。

他方、昭和30年代からプロパンガス化が進むにつれ、

竈は次第に姿を消していく。コンロが普及していくと竈が補助設備になり、1口の小型のものが用いられ、より移動可能な設備となる。

②焚口の向き

竈の変化点として焚口の方向性があげられる。床と土間境に据えられ、床上側に焚口があった竈は、土間側に焚口を向けるようになる。とりわけ、田辺市本宮町で昭和40年代以降にこの傾向が確認された。土間側に焚口が向けられると、焚く姿勢は立式となり、土間に炊事作業が集約するようになる(図4-2)。

また、床上側だけでなく土間側から焚けるように、竈の側面にも焚口を設けた改良竈が登場する。

このような竈の焚口の向きや位置の変化は、炊事作業の立式化、近代化によるものである。

4.5.2 焚き場の変容

熊野地方の民家の特徴である、竈がカッテの土間境や床上にある炊事場の空間構成が時代と共に変容していく。

①カッテの分割と機能分化

カッテの土間周りは、建具がなく開放的であったが、建具が入れられ部屋として独立していく。さらにカッテが建具で分割され、焚き場が土間炊事場側に分化する。

分化時期は明治、大正時代に遡り、建築当初から隣室に分化し、団欒室と食事・焚き場の組み合わせ、あるいは団欒・食事の場である茶の間と焚き場に分離された平面構成がみられる。

那智勝浦町口色川の大正10年(1921)に建築された民家は、カッテの土間境には竈が据えられ、半間幅の土間には流しを配した、典型的な炊事場の構成を継承しているが、4畳のカッテは焚き場で、建築時から食事と団欒の場は隣接した6畳のイマに分化し、茶の間形式がとられていた(図4-3)。

図4-4は、V型の平面構成における分化事例で、昭和25年の建築当初からカッテ中に建具が入り、焚き場が前土間側に分離している。焚き場は1畳半程の空間であるが、天井もなく開放的であるために、空間的には土間空間の一部である。他方、カッテは茶の間となっている。

②竈と焚き場の分離

焚き場をカッテから離し、炊事場を土間隅に設ける事例がある。焚き場はヒドコと呼ばれている場合があるが、1畳から3畳程のヒドコを土間隅に設け、その土間境に竈を据えてヒドコに座り焚く形態である。小規模な家屋

では、カッテとヒドコは、土間を挟み半間程度の間隔であるために、家人が移動するのに土間におりずに、床から床へと跨いだ(図4-5)。

このような分離した焚き場は、すさみ町、古座川町、那智勝浦、新宮市の明治時代から昭和30年頃までの間に建てられた8軒の民家でみられる。明治時代にはすでに、山林地主宅で建築時から焚き場が分離していた事例があることから、上層階層では早くから焚き場は分化傾向にあったと考えられる(図3-9)。

この分離した焚き場は、「通り土間後列カッテ張り出し型」の平面構成が大半であるが、古座川上流の「前土間カッテ後列張り出し型」にもみられる。

③ 竈の移設

カッテの端から50cm程離して竈を据え、その間に脚を入れてカッテに腰をかけて焚く形態がある。この場合、火の管理は「座る」姿勢から「腰かける」姿勢になる。

このような焚く姿勢がとられるようになった時期は、明確ではないが、昭和20年代にはすでに腰かけて焚く竈が存在し、昭和32年建築のすさみ町の民家では建築時より腰かける形態の竈であった。そのために、昭和30年代には一般化していたと考えられる(図4-6)。

さらに、昭和30年代後半から40年代以降になると、竈はカッテから分離して、土間中に移されていく。

姿勢的には、土間中に据えられた竈では、かがんで焚くのが一般的であったが、幅の狭いベンチに腰かけて焚く椅子座になった竈もある。その後、竈は土間中から土間隅の壁際に移され、立式へと変化していく。

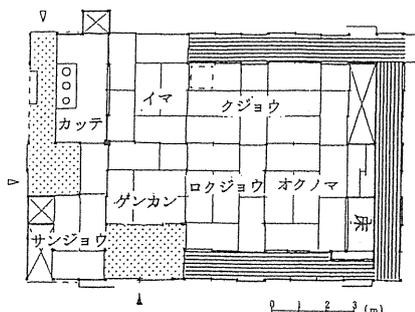


図4-3 カッテから分化した食事場と居間

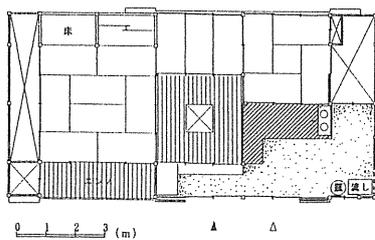


図4-4 カッテから土間側へ分化した炊き場

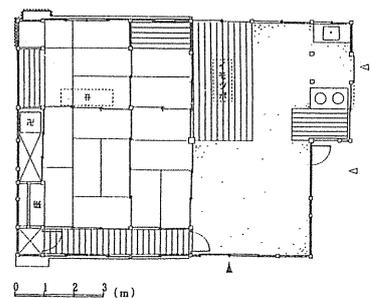


図4-5 カッテから土間隅に分化したヒドコ

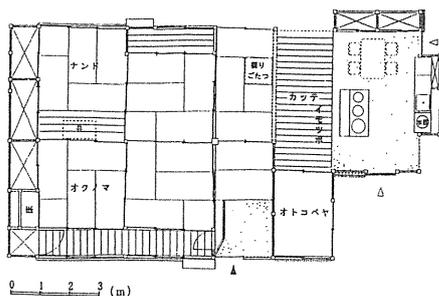


図4-6 カッテに腰かけて焚く竈形態

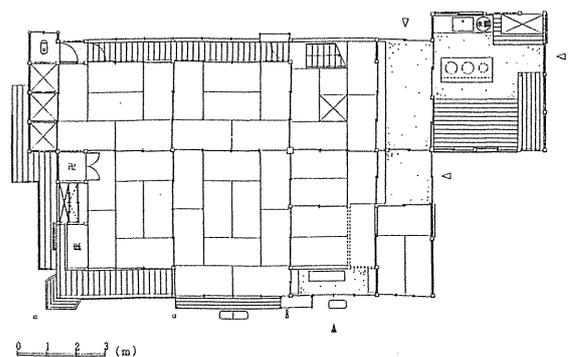


図5-1 食事場を兼ねた分離型焚き場

5. 食事空間の変容

熊野地方の民家の特性に、焚き場と一体になっていた食事空間があるが、食事の場が変容していく。

本章では、食事空間の変容を位置と起居様式から検討していきたい。

5.1 食事の場の変遷

カッテで行われていた生活行為の中でも食事行為が他室に移っていく。前章の焚き場の変化で、焚き場が土間隅のヒドコに分離する変遷が確認されたが、土間隅のヒドコで食事をする事例がある。ヒドコは、大きいものでは4畳の広さがあり、焚き場と食事の場を兼ねることができる。このような形態の焚き場が出現した時期は明確ではないが、明治時代中頃には、すでに山林地主などの上層階層の家屋でみられた(図3-9)(図5-1)。

他方、居間と一体になってカッテから食事の場が分化し、団欒・食事の場である茶の間と焚き場に分かれた平面構成がみられる。図4-3の家屋から大正中頃には、中上層家屋ではすでに分化していたことが把握される。

5.2 椅子座化

昭和20年代後半から食事の様式が椅子座へと変化し始めるが、椅子座化は、地域の伝統的な平面構成が根底となりながら試みられていく。

椅子座化は、とりわけ、通り土間形式の平面構成で普及し始める。土間の一角にダイニングテーブルと椅子を置き、食事をするダイニングキッチン形式が登場する。

昭和30年代には、床座と椅子座を併用した、折衷的な食事形態がみられた。カッテの土間境にテーブルを置き、下手土間側は椅子を用いる椅子座で、上手はカッテ上に座る従来の床座で食事する形態である。下手土間側は履物を履いたままであるため炊事作業がしやすく、上手カッテ側はくつろいで食事ができる利点がある(図5-2)。伝統的な生活の場が段階的に椅子座化することを示す、変容事例である。

一方、昭和25年建築のすさみ町の家屋では、1畳半の大きさのヒドコと食事の場が土間の両側に分離して設けられ、竈は座式で焚くが、食事には椅子座が取り入れられている。食事の場は土間に椅子とテーブルが置かれ、その向かいに1尺位の幅の狭い板張り部分が設けられている。これらの地域では、土間沿いの幅1尺位の上がり板をコエンと呼んでいるが、それと類似している。家族の一員がここに腰かけて食事をする(図5-3)。

他方、カッテを除去して土間にして、土間形式のダイニングキッチンとする流れがあり、カッテを含めた空間構成が変容し始める。

さらに、昭和40年代半ば頃から50年代以降には、農作業の機械化や作業用の履物改善などの影響もあり、土間炊事場の必要性が低下し、床上のダイニングキッチンへと変容していく。

6. 平面構成の変容

調査対象家屋は、いずれも竈が残されている、あるいはかつてあった、江戸時代末期から昭和40年代までの家屋であるが、本章では前章で検討した炊事場や食事空間を含め、平面構成の変容について考察する。

変容要因として居室の増設もひとつであり、「前土間並列型」から「前土間後列カッテ張り出し型」といった平面構成の変容につながるものもある。しかし、とりわけ、カッテの機能分化による変容が指摘される。カッテは、団欒、食事、炊事、日常的な接客の最多で4つの機能をあわせもっていたが、これらの機能が分化していく。そのなかでも、すでに型として分化している、「前土間カッテ・炊事場並列張り出し型」は別として、まず、炊事の機能が土間に移行する。とりわけ、「通り土間カッテ後列張り出し型」や「L型土間並列一部縦二列型」

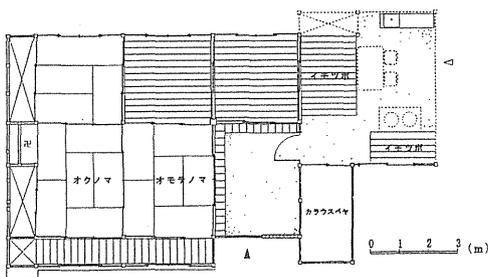


図5-2 床座とイス座の折衷様式で食事する例

(図4-4)では、焚き場が土間側に分化し、土間に炊事作業が集約されていく。また、「前土間カッテ前後列張り出し型」から「前土間カッテ・炊事場並列張り出し型」に平面構成が変容する事例もある(表2-1)。

食事行為は、前章で述べたようにカッテから分化し、団欒と共に茶の間化されるものと、焚き場と共に炊事場に分化する変容がある。早いものでは、明治時代中期の建築当初から分化した平面構成もある。

ゲンカンノマは庄屋格の上層階級ではすでに江戸時代末期から間取り形式に組み入れられ、明治時代には格式的な玄関構えをもつ家屋がある(図3-9)(図5-1)。一般化されるのは、さらに後で、「前土間カッテ前後列張り出し型」、「前土間カッテ・炊事場並列張り出し型」では、カッテの前面が建具で分割され、アグリグチやゲンカンノマが戸口正面に形成されていく(図6-1)。

つぎに、土間の変容があげられる。昭和30年代以降、土間部分の変容していく傾向がみられる。とりわけ、通り土間型では前土間間に居室や収納空間が設けられ、前土間空間が狭くなっていく。さらに、当初より前土間間に居室等の空間がなく土間が狭められた図6-2のような形態も出現する。この家屋は、昭和6年建築の兼業農家であり、作業用の土間の必要性は低く、出入口と通路としての機能のみが残されている。座敷は1室構成であったが、昭和30年代になり前土間が居室化され2室構成になり、前土間型に変化していく。後列は建築時から居間とカッテに分化しているが、昭和50年代にはカッテを除去して床上ダイニングキッチンに改造し、奥土間も縮小する。

図6-3は、焚き場が撤去されて、昭和50年頃に床上ダイニングキッチンに変容した事例である。並行して、前土間も応接間化され、張り出し玄関を付設して、近代的な平面構成に変容する。

他方、昭和30年代には、近代の平面構成の特徴と考えられる廊下が伝統的な平面構成に組み入れられていく。

戸口から梁行方向に縦に廊下を通る形態と、前後列の部屋境に桁行方向に中に廊下を通る形態、さらに、両者が組み合わされた形態がある。

図6-4は縦廊下の新築事例で、昭和35年建築の新宮市木ノ川の家屋である。玄関横に3畳大の応接間が設けら

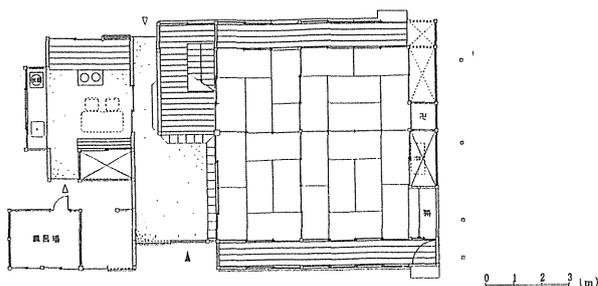


図5-3 椅子とコエンに腰かけて食事する事例

れるなどの近代的な要素が取り込まれる一方、主屋後方には伝統的なカッテに竈が据えられた炊事場が付設する。

新築時から廊下を取り込まれた平面構成だけでなく、改造による変容事例がある。「通り土間カッテ後列張り出し型」から昭和40年から50年代に前土間を改造し、縦廊下を導入した事例が2軒ある(表2-1)。

廊下を導入した平面構成では、縦廊下と中廊下を組み合わせた型が一番新しく、昭和50年代以降の新築家屋で見られる。この型になると伝統的な前座敷の平面構成は残されているが、竈はすでに設置されずに、炊事場は床上化されたダイニングキッチンである。また、玄関構えは張り出し玄関になっている。しかし、張り出しは半間程度であり、ホールは狭く、紀北の紀の川流域でみられた1間以上の張り出しや広い玄関ホールをもち、格式的な意匠性を備えた玄関構え^{*)}には至っていない。近代化にも地域特性が認められる(図6-5)。

7. 結論

上述の考察結果から、以下の知見が得られた。

(1) 熊野地方の平面構成の特性

熊野地方には複数の平面構成があり、紀北や紀中には

みられない「通り土間広間型」や山間部特有の平面形態と考えられる「前土間並列型」、「前土間二列カッテ張り出し型」、「前土間カッテ・炊事場並列張り出し型」、「L型土間並列一部縦二列型」が確認された。

(2) 平面構成の地域性

平面構成には地域特性がある。富田川、日置川流域は通り土間型の平面構成の分布域であり、流域でも下流から中流域では「通り土間整形型」が、中流から上流域では「通り土間カッテ後列張り出し型」が分布する。一方、すさみ川下流域に「通り土間カッテ後列張り出し型」が分布するが、上流域では「前土間二列カッテ張り出し型」がまとまって分布している。古座川流域は「通り土間カッテ後列張り出し型」、「前土間二列カッテ張り出し型」、「前土間並列型」が混在している。太田川流域では「前土間カッテ前後列張り出し型」が主で、熊野川下流域では「前土間カッテ・炊事場並列張り出し型」、本宮町では「L型土間並列一部縦二列型」が集中的に分布する。

(3) 竈と平面構成との関係性

熊野地方では、カッテと土間境やカッテ上に竈が位置するが、竈の位置と平面構成に関係性がみられる。カッテと土間境に竈が位置するのは、通り土間系統では、土間にカッテが張り出す平面構成である。一方、前土間系

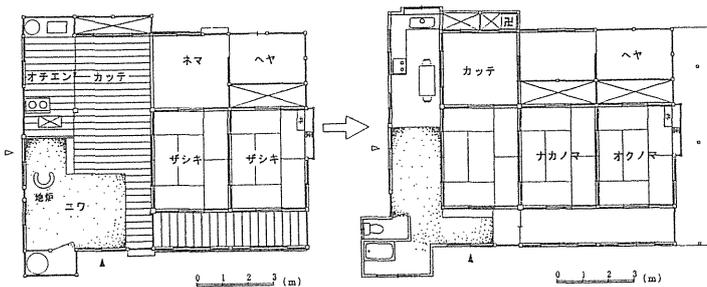


図6-1 前土間カッテ・炊事場並列張り出し型のカッテの分化

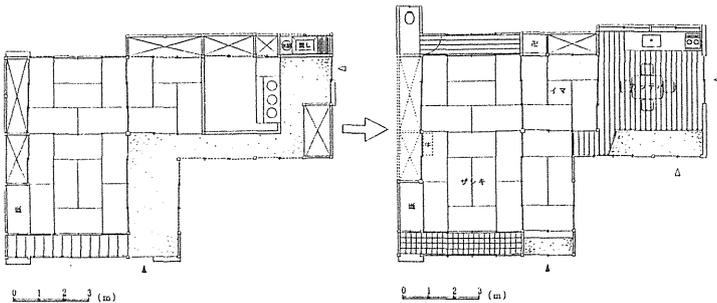


図6-2 I(3)型からIV(1)型への変遷

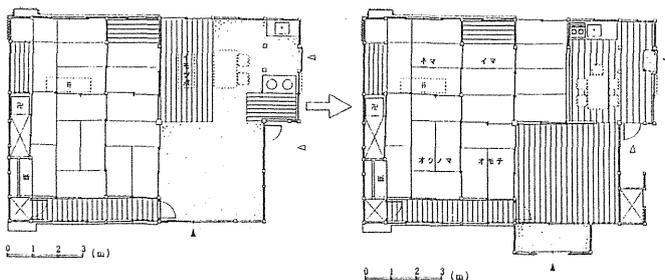


図6-3 通り土間カッテ後列張り出し型のDK化と土間の床上化

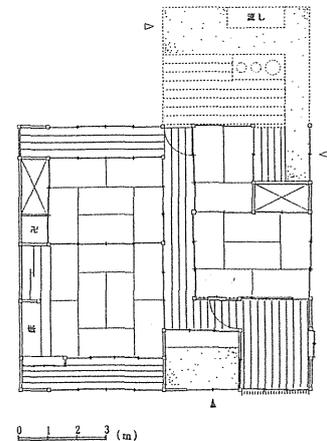


図6-4 廊下型例1

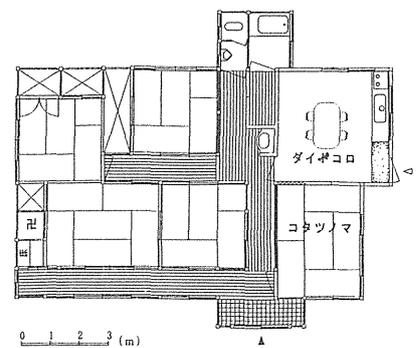


図6-5 廊下型例2

統では、土間境とカッテ上の両方に竈が位置する。

そのために、竈が土間境や床上に位置する平面構成の分布域は田辺市大塔村から白浜町市鹿野、すさみ町周参見を結ぶ線の東部である。とりわけ、那智勝浦町、新宮市、本宮町の一部で床上に竈がある平面形態が分布する。

(4) 竈と焚き場の変容

竈は、材料や施工方法が近代以降変化し、より強固な造りで、美しい仕上げに変化するだけでなく、既成品化が進み、施工の容易性や移動性が加味されていく。

一方、竈の位置や焚き場、焚く姿勢が変化していく。床上に座して焚く姿勢から、竈が土間に移設され、カッテや椅子に腰かけて焚くようになる。通り土間形式では最終的には土間の壁際に設置されて、立式で作業が行われる。変遷に応じて、竈は焚口を側面にも備える、土間側に焚口を向ける、高さを高くする等の変化が行われる。

(5) 食事の椅子座化

椅子座化される部屋は少ない。椅子座化が最も早く行われるのは食事の場である。昭和 30 年代から椅子座化が進んでいくが、初期の頃にはカッテ端にテーブルを置き、カッテ側は床座、土間側は椅子座とする折衷的な用い方がみられた。その後、ダイニングキッチン化が進む。

(6) 平面構成の変容

近代化は部屋の機能分化の過程でもあるといえるが、熊野地方の民家では、とりわけ、機能が集約していたカッテから機能が分化していく。カッテの分割や部屋の増設により竈の焚き場が土間側に分化し、新たなカッテが造られる。早いものでは、明治時代から分化した平面構成もある。食事の場は、茶の間化して上手床上側に残る場合と竈の焚き場と共に土間側に分化する変遷がある。一方、カッテの前面が分割されて、接客・応対のためのアガリグチやゲンカンノマが確立されていく。

昭和 30 年代までは各型が比較的継承されていくが、以降は変容していく傾向がみられる。とりわけ、通り土間型では、土間奥のダイニングキッチン化と前土間の床上化により土間が縮小していく。他方、昭和 30 年代には、近代の平面構成である廊下型が伝統的な平面構成にも組み入れられ、50 年代以降は床上ダイニングキッチンをもつ廊下型が登場し、平面構成も変容していく。

本論文では、熊野地方の民家の平面構成の特性と変容に関して新たな知見が得られたが、全貌を掌握するにはさらなる資料の充足や考察が必要である。とりわけ、熊野地方でも新宮市から東部と、北山村から十津川村に至る北東部を今後の研究課題とし、解明に努めていきたい。

<注>

- 1) 本論文では、熊野地方の範囲を、田辺市以南、東部は三重県尾鷲市までとし、瀨峡沿いの北山村や十津川村をも含む一帯とする。竈が土間と床上境、あるいは床

上にある民家が紀州でも熊野地方にみられることから、このような炊事場をもつ民家を本論文では便宜的に、「熊野型」と仮称する。

- 2) 平成 15 年から 16 年に実施した、田辺市 (1 軒)、古座川町 (10 軒)、那智勝浦町 (12 軒)、熊野川町 (3 軒) の調査資料をも考察に用いる。これらの研究成果の一部は、文献 2)、4)、5) で発表している。
- 3) 本研究成果の一部は、文献 18) で発表している。

<参考文献>

- 1) 和歌山県教育委員会：和歌山県の民家、和歌山県文化財学術調査報告書第 4 冊、1969
- 2) 千森督子：紀州民家の地方性と近代化に伴う変容に関する生活史的研究、大阪市立大学大学院生活科学研究科生活科学専攻博士論文、pp. 23~49、2005
- 3) 前掲 2)、pp. 50~59
- 4) 千森督子：紀伊山地の過疎山村の高齢者の居住環境整備に関する研究 その 1 北山村小松集落、pp. 25~31、信愛紀要 Vol. 43、2003
- 5) 千森督子、米村敦子：瀨峡の民家-木津呂集落の屋敷構えと家屋形態-、pp. 23~30、民俗建築第 124 号、2003. 11
- 6) 杉本尚次：近畿地方の民家、明玄書房、p. 173~174、1978
- 7) 社) 日本建築協会編：ふるさとのすまい日本民家集、pp. 129~130、大日本印刷、1962
- 8) 野田三郎：日本の民俗 30 和歌山、pp. 42~43、第一法規出版株式会社、1974
- 9) 石原憲治：日本農民建築第四輯(近畿地方Ⅱ)(復刻版)、南洋堂書店、pp. 9~45、1972
- 10) 田辺市史編さん委員会：田辺市史第十巻史料編Ⅶ、田辺市、pp. 384~394、1991
- 11) 中辺路町誌編さん委員会：中辺路町誌下巻、中辺路町、pp. 667~669、1990
- 12) 上富田町史編さん委員会：上富田町史第四巻史料編下、上富田町、pp. 577~592、1992
- 13) すさみ町誌編さん委員会：すさみ町誌下巻、和歌山県西牟婁郡すさみ町、pp. 449~468、1978
- 14) 山口登志夫：古座川町史前近代篇、pp. 144~147、1987
- 15) 那智勝浦町史編さん委員会：那智勝浦町史下巻、那智勝浦町、pp. 649~656、1980
- 16) 新宮市史編さん委員会：新宮市史、p. 319、1972
- 17) 北山村史編纂委員会：北山村史下巻、pp. 250~255、1987
- 18) 千森督子：紀南の竈床上型民家におけるカッテの特性と近代化に関する研究、平成 20 年度日本建築学会近畿支部研究報告集、pp. 361~364、2008
- 19) 日本民俗建築学会編：図説民俗建築大事典、pp. 168~183 柏書房、2001

<研究協力者>

- 中井 あずみ 大阪市立大学大学院生活科学研究科博士前期課程(平成 19 年度、20 年度)
- 宮脇 彰宏 大阪市立大学生生活科学部 4 回生(平成 19 年度)
- 上野山永吏菜 大阪市立大学大学院生活科学研究科博士前期課程(平成 20 年度)
- 三枝 知世 大阪市立大学生生活科学部 4 回生(平成 20 年度)